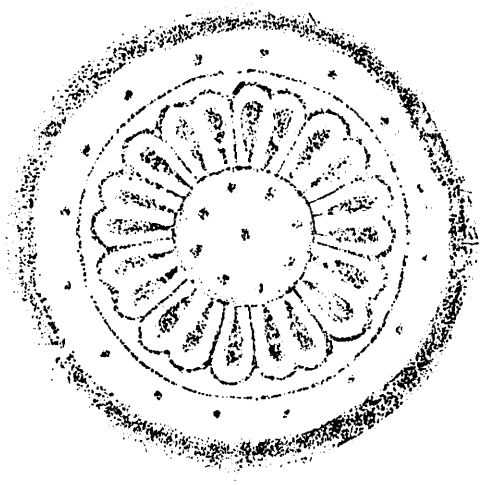
平安宮朝堂院永寧堂跡の発掘調査



財團法人　古　代　學　協　會

平　安　京　調　査　本　部

昭　和　52　年　6　月

平安宮朝堂院永寧堂跡の発掘調査

はじめに

財團法人古代學協會はその発足当初より平安宮・京の発掘調査を実施し成果を挙げている。殊に，平安宮とりわけ内裏・朝堂院関係の発掘調査は平安時代研究にとって極めて重要な役割を担っており，これまでも重点的に精査が続けられて来た。今回の発掘地である京都市中京区聚楽廻り東町22番地の該当地は従来の調査結果より平安宮朝堂院の西南部にあたる可能性が強く，過去の調査でも近接地で朝堂院修式堂及び延禄堂の基壇が検出されている。

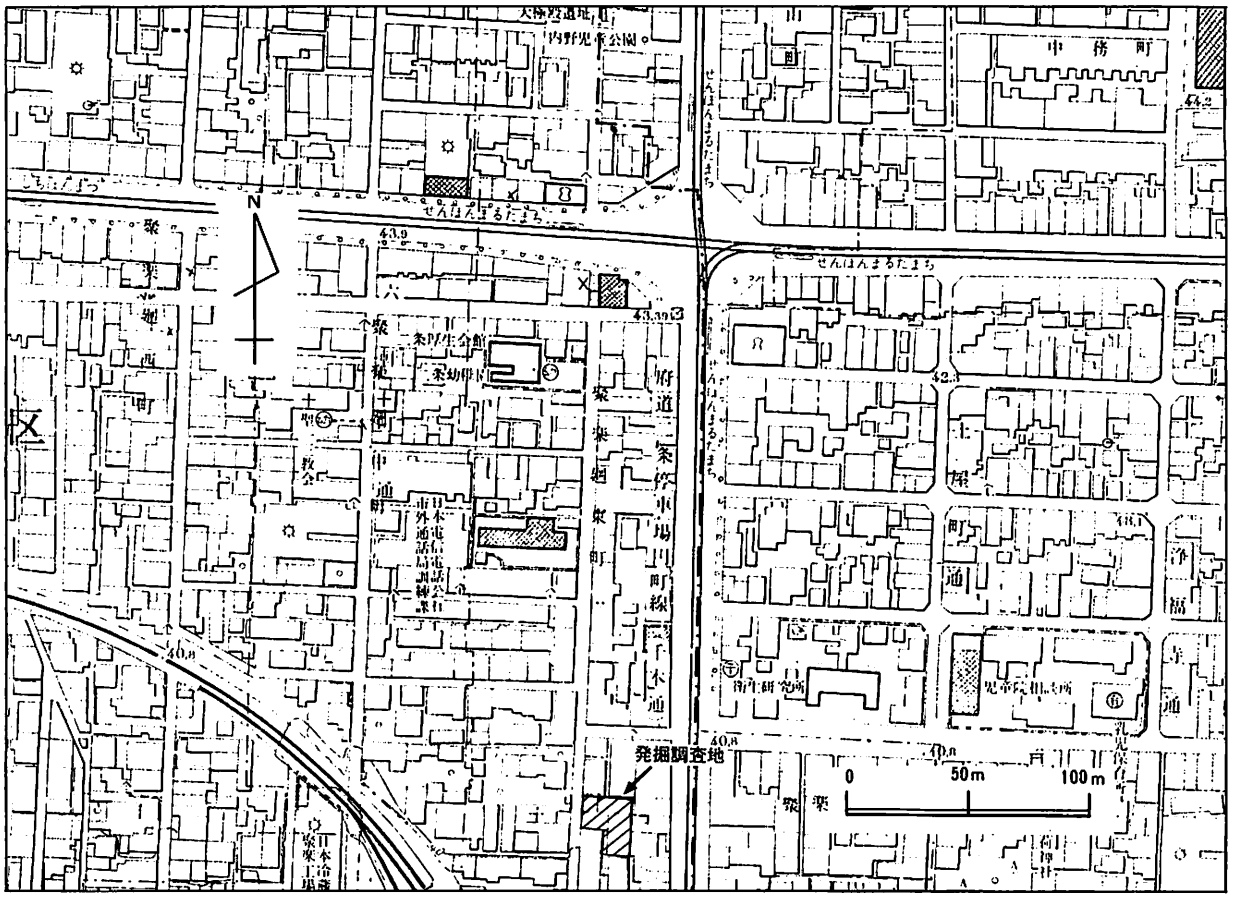
（財）古代學協會平安京調査本部は，上記の聚楽廻り東町22番地が平安宮朝堂院永寧堂跡に該当すると考え，同地での家屋改築にあわせて二度にわたる調査を行った。期間は昭和51年５月10日から同年６月５日までおよび同年９月７日から20日までで，本報告ではそれぞれ平安宮永寧堂跡第１次調査，同第２次調査と呼ぶことにする。

第１次調査は京都市観光局文化財保護課の委託により昭和51年度の国庫補助を得て，第２次調査は財団法人高梨学術奨励基金の援助を頂き調査を行った。

本稿の執筆は，遺物の項を松井忠春が，それ以外を佐々木英夫が担当した。図は遺物関係は松井が作製し他は製作協力者による。写真は佐々木が作製した。

なお，写真図版の縮尺は原則として軒瓦類1/3，文字瓦類1/2，格子目瓦1/3，その他の瓦類1/4である。

本編の編集は佐々木が行った。



第１図　発掘調査地位置図

調査団の構成

調査団長

角田文衛（平安博物館々長）

調査員

甲元　真之（平安京調査本部）

佐々木英夫（平安京調査本部）

松井　忠春（平安京調査本部）

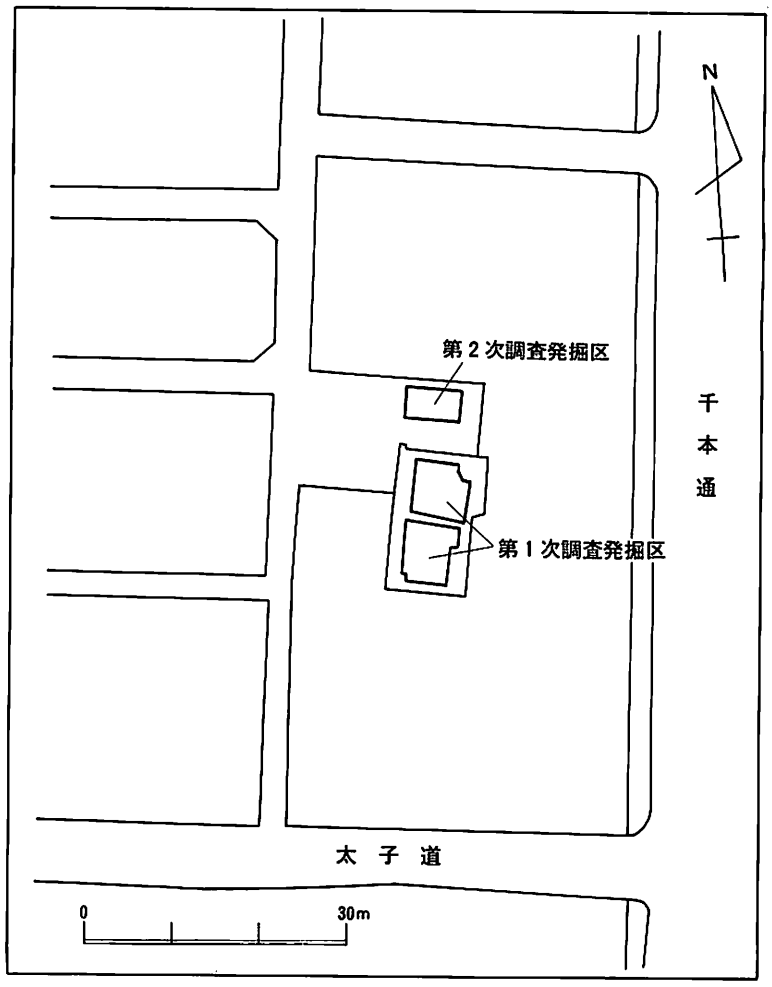
調査補助員

鈴木弘市，大槻真純，古城博子，三宅純子，芳村高史，原田雅裕，鈴木俊則，南部基，三宅憲明，加藤晴久，小松紀子，橋田祐子，山下武久，森田さと子，尾崎章子，漆崎薫。

調査作業員

橋本庄次，橋本敏治，品川仙太郎，吉田辰次郎，大根清一，岩波幸太郎，木村芳久，村上藤一，中埜裕司，小泉隆司，横田博紀。

尚，第１次調査の責任は甲元，第２次調査の責任は佐々木が負うものである。



第２図　調査地附近平面実測図

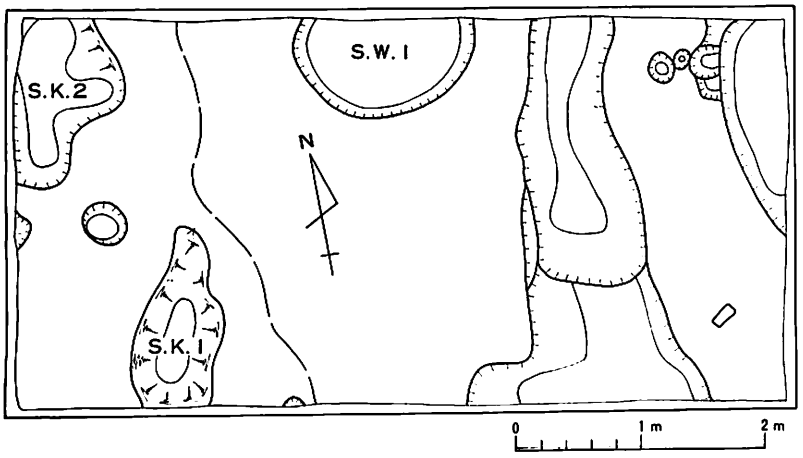
調　査　内　容

第１次調査

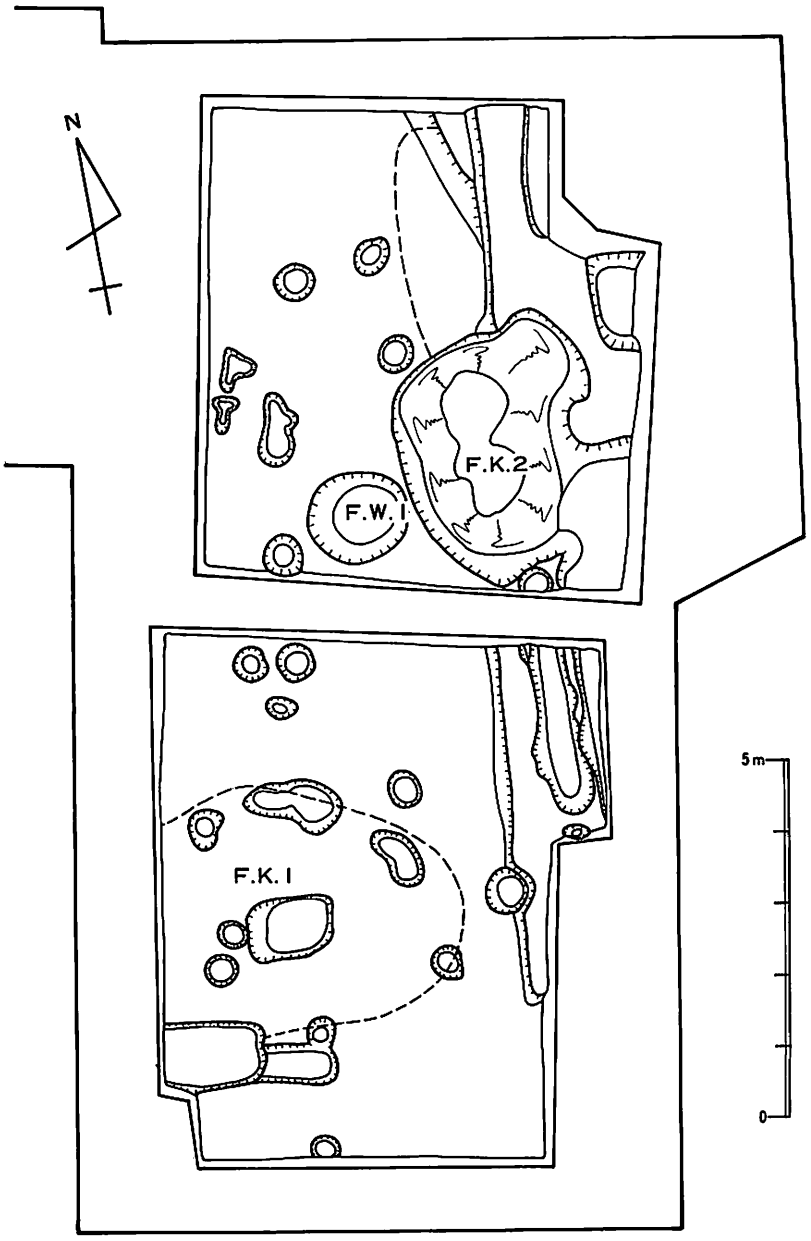
発掘調査地点は，過去に朝堂院修式堂の基壇が検出された個所の南方約35mで，推定会昌門跡発掘調査地と東南部で接している。調査は敷地内の中央部に南北に長い15m×５mの調査区を設定しこれを南北に二分して発掘調査を行った。また，遺構の検出状態によっては各方向に拡張して調査を続ける計画であった。

南側発掘区では，表土下に粘質の砂礫土層がほぼ一様に拡がり，下部へゆくに従い色調は黄茶褐色，褐色，暗褐色と変化してゆく。続く第３層の茶褐色粘質砂礫土層では平安時代の瓦片が出土するが，それらとともに江戸時代の伊万里焼や唐津焼の破片も認められる。南区のほぼ中央部で，第３層から切込まれた，平安時代の瓦を出土する瓦溜（Ｆ.Ｋ.１写真）が検出され西に延びるため，西側発掘壁を拡張したが隣接地に住宅があり拡張部分が0.5m程にどまって，該当する瓦溜遺構の全体の輪郭を把握するにはいたらなかった。以下第４層の暗褐色粘質砂礫土中では，江戸時代と判定される遺物はみられなかったが，基本的には上層と同様，江戸時代の整地層と考えて大過あるまい。他に，地上に切込んで平安時代の遺物のみを伴出する二筋の溝が南区の東北隅で検出されたので，遺構の性格を把握するため南北３m東へ１mほど拡張したが，充分に知ることはできなかった。

北区では、南区に連続する江戸時代の整地層が表土下に３～４層存在する。北区の中央部南壁近くで最下の整地層から掘込まれた１件の井戸（Ｆ.Ｗ.１）が検出された。井戸は素掘りで，内部には礫と平安時代と判定される瓦片（瓦当面を含む）が投げ込まれており，それらに混って少数の唐津焼の皿や丹波焼の擂鉢の破片が認められた。江戸時代の早い時期に整地された際，後述する瓦溜を含めて削平され埋められたと推定される。北区の東寄の個所では，現代の瓦溜と近接して平安時代の瓦片のみを出土する瓦溜（Ｆ.Ｋ.２）が発見された。大規模ではないが，出土瓦の量が多く土器は殆ど認められない。この一部は北方向に細長く延びているが，これはＦ.Ｋ.２が整地された際瓦片が北に動かされたものの一部と推定される。Ｆ.Ｋ.２の東限を確認するため，南北５m，東側へ1.5mほど拡張したところ，比較的浅い落込みが検出された。ここでは，Ｆ.Ｋ.２ほどではないが，かなりの量の瓦片の出土を見ている。



第3図　第2次発掘区平面実測図

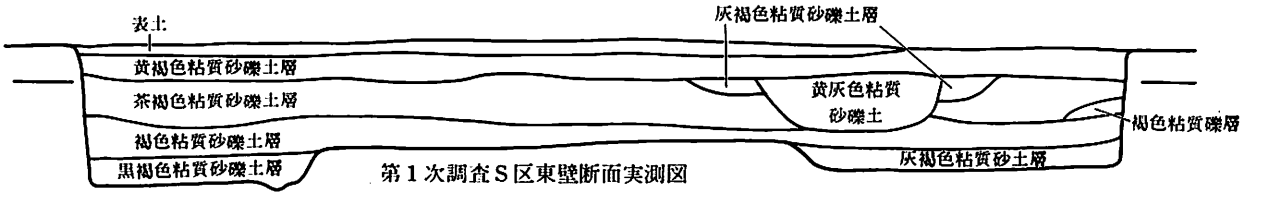


第4図　第1次発掘区平面実測図

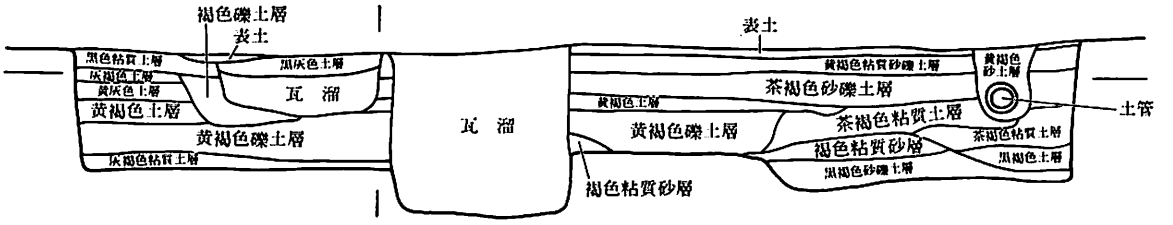
全体としては，大量の平安時代の瓦片(コンテナバット200箱分)を検出した瓦溜等，参考になる遺構が発掘区内で確認されたが，朝堂院永寧堂の存在を積極的に証明する基壇などは，今回の発掘区域内では認められなかった。

第2次調査

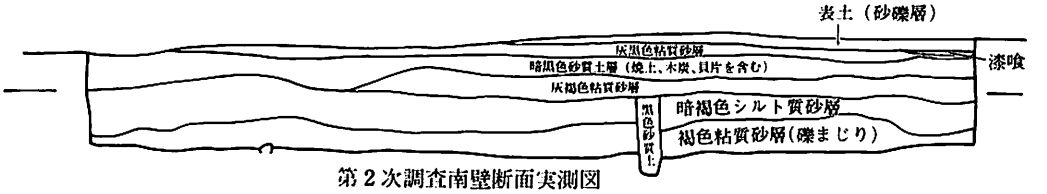
第1次調査の結果では，朝堂院永寧堂のものと考えられる基壇その他の遺構を検出できなかったので，第1次調査発掘区の西北方に永寧堂の位置を推定し時期を改めて第2次発掘調査を実施した。発掘区の関係もあって，前回の北側に東西6m，南北3mの発掘区を設定した(第1次調査発掘区との位置関係は第2図参照)。平均で15cmの表土を剥ぐと第1次調査の際検出された黄褐色の粘質砂礫土が続く。それ以下の層も第1次調査の場合とほぼ同様な構成で3～5層の江戸時代の整地層が続いている。北壁にかかる中央部では表土直下より掘込まれた素掘りの井戸（S.W.1）が検出された。井戸中の砂質土の堆積からは近世の瓦片及び陶磁器片が若干検出されたが桃山時代以前の遺物は認められなかった。発掘区の西南部で南壁に接する瓦の堆積（S.K.1）は注目される。厚さは約0.2m内外で瓦溜とは呼べないが，すべて平安時代の瓦片が堆積しており，瓦当部分も検出されている（写真10）。この遺構は発掘区南壁まで続き全体の確認はできなかったが，第1次調査の結果からも範囲の限定された遺構と考えられる。出土した瓦の年代は，第1次調査の際，北側発掘区で検出された瓦溜（F.K.2）及びその北方向に延びていた瓦の堆積と同時期の瓦で，近世の遺物の混入は認められなかった。発掘区の西北隅では近世の掘込み（S.K.2）が検出されたが，出土する陶磁器片や層序より江戸後期の遺構と判定される。発掘区中央より東側では南北に走る落込みと東北隅の掘込みが認められるが，いずれも江戸時代の整地層に残されており，永寧堂に直接関連す



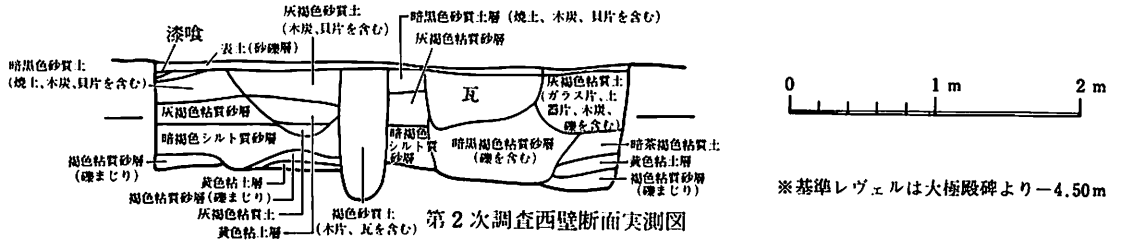
第１次調査Ｓ区東壁断面実測図



第１次調査Ｎ区東壁断面実測図



第２次調査南壁断面実測図



第２次調査西壁断面実測図

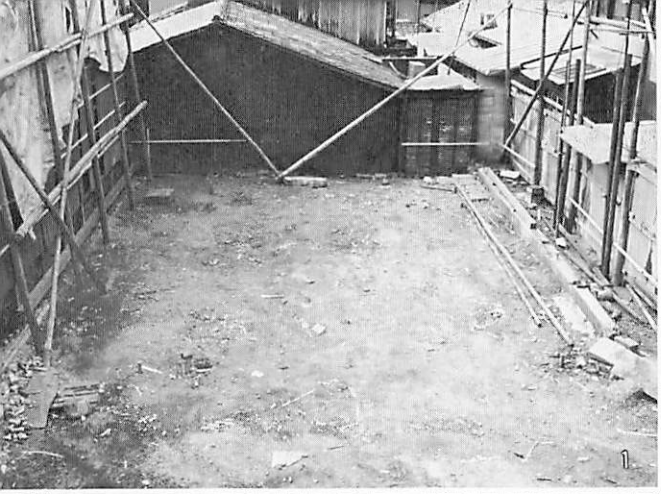
第５図　発掘区断面実測図

る遺構ではない。

第２次調査は，前回の調査地の北側を補完する目的で行なわれたが，結果的に朝堂院永寧堂の遺構を検出するには到らなかった。

調　査　総　括

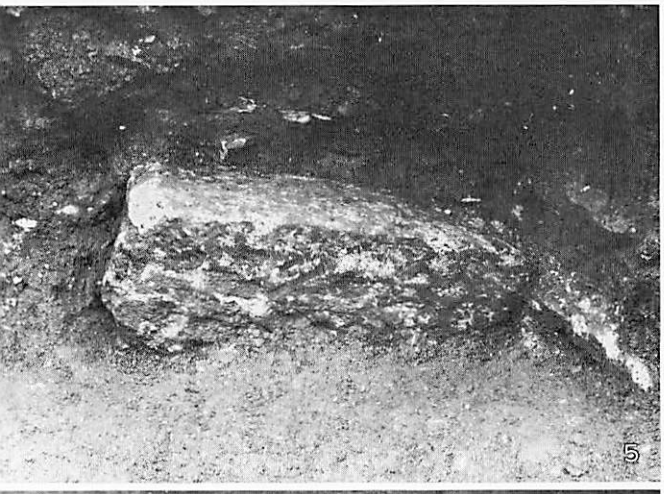
平安宮朝堂院中の一宇，永寧堂については史料的に不明な点が多い。今回出土した瓦片の形式，製作技法，瓦当文様の様式等からみて，天喜六年（1058）に平安宮朝堂院が焼亡した際，この永寧堂も罹災したことが推定される。これ以後は，近接する会昌門やそれに付随する回廊等が風雨のため倒壊したことが識られるが，これに関連して永寧堂が罹災したかどうかは不明である。最終的には，安元三年（1177）に朝堂院が焼亡して後，再建されることはないが，その時点のものと判定される遺物は，瓦類を含めて検出されていない。安元三年当時は，永寧堂が廃絶されていたことは考え難いので，或いは保元三年（1158）に信西入道が朝堂院を修復した時，瓦葺にしなかったという『源平盛衰記』の説を裏付けるものであるかもしれない。出土した遺物，ことに瓦類については別稿で製作年代や生産地に関する考察が述べられるが，平安時代における朝堂院永寧堂の具体的な遺構について今回の発掘調査の結果から言及できることは殆どない。ただ，今回出土し大量の瓦片が平安中期以前の製作になると思われるため，発掘地に近接して同時代の建築があったことは確実で，これが永寧堂に該当するのは過去の立会調査に依り，同じ朝堂院の修式堂・延禄堂の基壇を構成した凝灰岩の検出された成果からも妥当な結論と考えられる。しかし，今回の瓦の堆積した状態は建造物が倒壊した際，雨落溝等に埋ったとするには不自然で，これらの瓦が直接に利用された建築の具体的な位置を正確に把握するには到らないが，平安中期以前の瓦しか検出されないことなど，幾つかの特徴も提示されており，今後の平安宮朝堂院を考察するに際して頗る有力な手掛


1

2

3

4


5

6

7

8

1）発掘地全景，2）北側発掘区，3）南瓦溜，4）北区瓦溜，5）南区凝灰岩出土状況，6）北区瓦溜断面，7）南区瓦溜出土状況，8）同前，以上第1次調査。9）発掘地全景，10）中央部瓦落軒丸瓦出土状況，11）発掘区全景，以上第2次調査

りを与えてくれるものである。

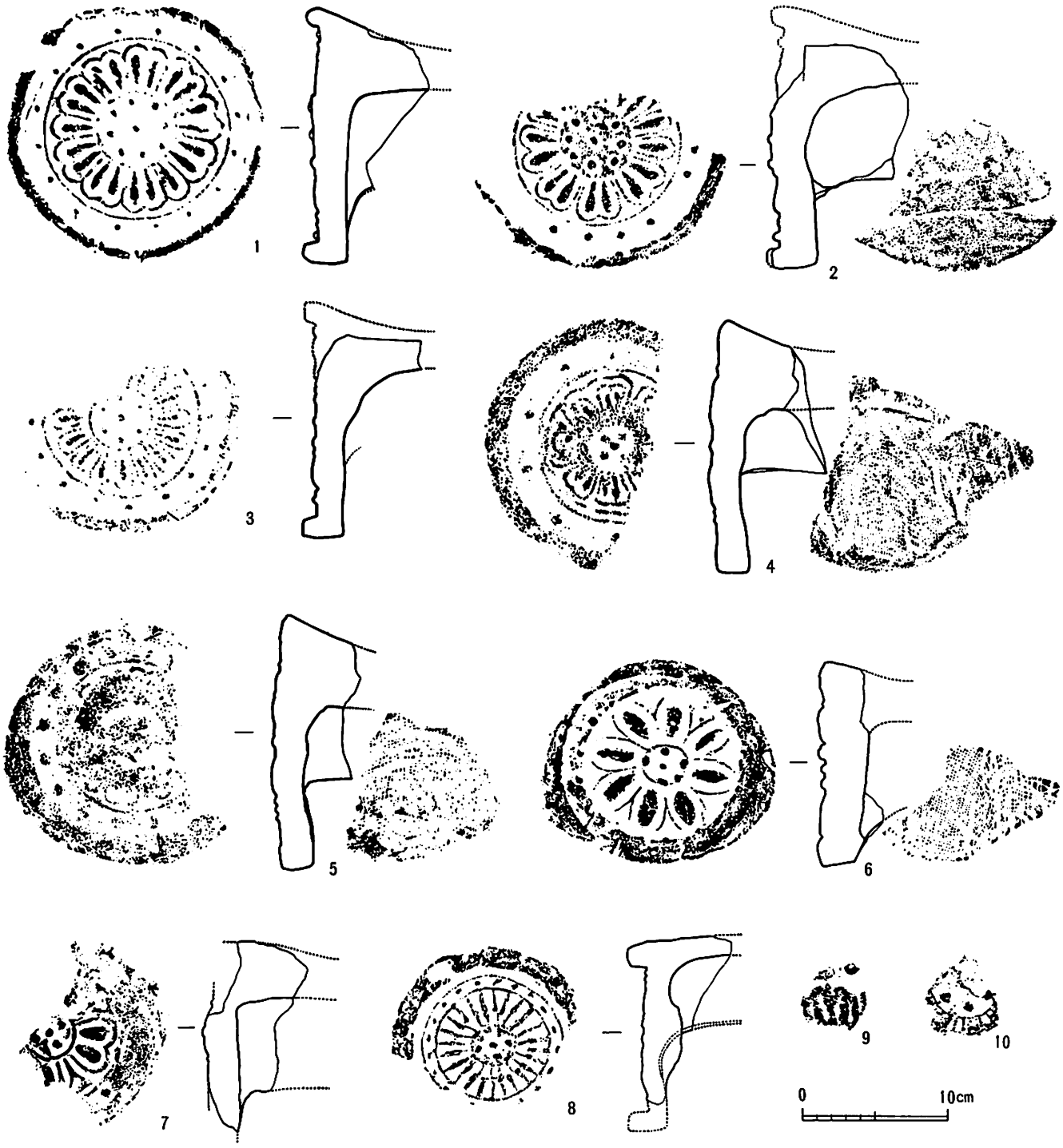
出土遺物

二次にわたる発掘調査によって出土・採集された遺物は膨大な量に達する。そのうちの殆んどが瓦類である。その他に土師器皿，須恵器の小破片並びに美濃系天目茶碗や唐津系皿を始めとした近世陶磁器片が極く少量発掘された。瓦類は，発掘区北側の瓦溜から採集されたものが大部分で，軒丸瓦，軒平瓦，丸瓦，平瓦，鬼瓦に分類できる。

（1）軒丸瓦

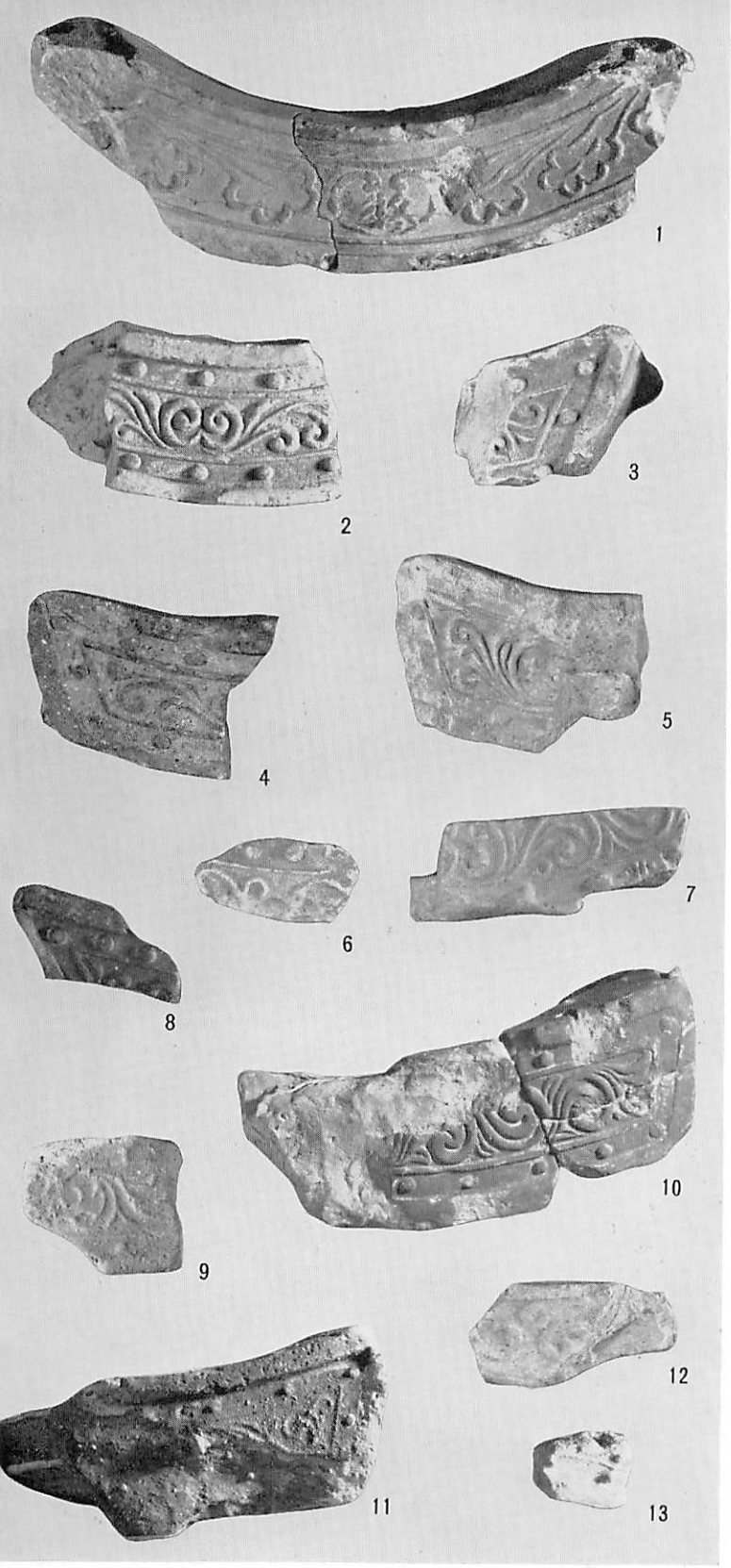
軒丸瓦は主に平安時代中期以前のもので，平安時代後期のものが一点と，時代が下って近世初頭の巴文軒丸瓦が数点ある。平安時代前期の軒丸瓦としては複弁十葉蓮華文軒丸瓦と単弁十六葉蓮華文軒丸瓦とがある。前者は複弁で構成されてはいるが，左右斜め位置に各単弁一葉を配する場合（1，第6図―1）と右側中央に単弁二葉を並置させ複弁化する場合（2，第6図―2）とがあるがともに基本的には複弁十葉となる。中房内に1＋8の蓮子を配し，文様面は深く，外区内縁に高い珠文の珠文帯を設けるが珠文間は等間隔ではあるがその幅を各々異にする。外周には笵型痕が顕著にみられ，さらにヘラケズリで調整している。瓦当裏面はヘラケズリ調整や指ナデ調整を施し，ヘラケズリ痕がナデ調整されずに残存する場合もある（第6図―2）。本例のような特異なモチーフの瓦は民部省跡から出土している。西賀茂瓦窯では複弁七葉＋単弁一葉の軒丸瓦がある。胎土・製作技法は西賀茂瓦窯産と極めて類似する。後者は外縁から段状に深くなり内区文様面で一定した深さとなる断面を呈し，文様は太

く鮮明で，外周には笵型痕が一部みられ他は縦位にヘラケズリ調整する。瓦当裏面はヘラケズリの後丸瓦部凹面に向って指ナデ調整を施す。内裏跡，朝堂院跡，豊楽院跡等で同笵瓦の出土をみる。大阪吹田岸部瓦窯産である。複弁四葉で一本造り軒丸瓦のはしりの型式のもの（7，第6図—7）も1点あって，弁間文は太く，瓦当裏面には布目痕が顕著である。この型式の瓦は朝堂院跡や豊楽院跡からも出土している。平安時代中期の軒丸瓦としては栗栖野系のもの（4・5 第6図—4・5）と『左』の銘をもつ単弁八葉の一本造りの瓦がある。いずれも瓦当裏面に布目痕が認められる。栗栖野系軒丸瓦は花弁の差異により二分される。すなわち，弁間文が連続し圏線の如き形状をなし花弁が合せ笵型により合せ部分で形崩れしたもの（4，第6図—4）と，弁間文が連続せず複弁2葉ごとに弁間文を配する典型的な栗栖野系瓦（5，第6図—5）とである。共に朝堂院跡から同笵瓦の出土をみる。後者の『左』字



第６図　出土軒丸瓦拓影及び実測図

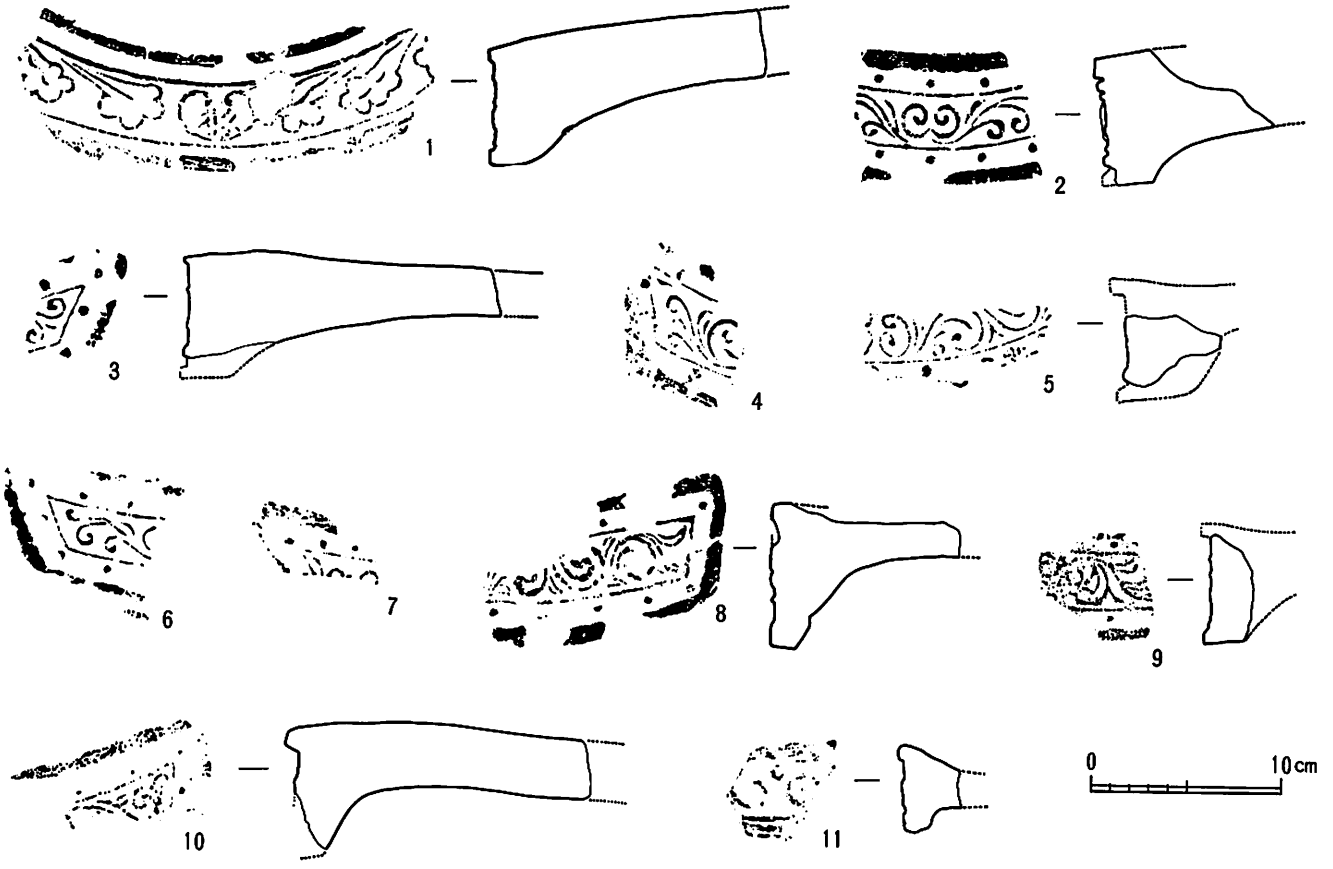
軒丸瓦は，瓦当面が隋円形をなし，外縁は高さはないが幅広く，珠文帯が外区内縁に沿って一段高い所に疎く位置し新羅瓦の如きである。その珠文間に『左』を陽刻する。外周はヘラケズリ調整を顕著に施こしている。これらの平安時代中期までの軒丸瓦は発掘区北側に集中する瓦溜，特にＦ．Ｋ．２出土が主である。平安時代後期に至ると尊勝寺跡などから出土している剣頭文状蓮華文を内区文様とする堅緻な軒丸瓦がみられる（８，第６図―８）。外周はヘラナデ調整を顕著に施し，瓦当裏面は中央部が小拳大に盛上り一面を指ナデ調整し須恵器製作手法を思わせる。想らくは播磨産瓦であろう。この他に花弁の大形・退化した蓮華文や幡枝系複弁四葉蓮華文軒丸瓦などが



ある。こられは発掘区南側の瓦溜や井戸状遺構内より出土したものである。

（2）軒平瓦

軒平瓦は，軒丸瓦同様，平安時代中期以前のものが大部分を占め，2～3点平安時代後期の瓦もある。すなわち，奈良型式の瓦（1，第7図―1）は，中心飾り内に修理式を意味すると言う『修』宇銘を陽刻しその左右には両脇区上隅より中心飾りに向って二条の飛雲文が左右対称形に配された平城宮6801型式瓦で,文様面は浅く,上外周を横ヘラ調整し，下外周は縦ヘラ調整し顎は丸味を帯びる。平瓦部凸面には縄目痕が縦方向につき，朱が附着している。また西賀茂瓦窯系や播磨地方の野条式軒平瓦と共通する軒平瓦がある（2～4，第7図―2 3）。これは，C字形を対応連続させた中心飾りの左右に葉の形を異にした唐草文を配す。曲線顎で，上・下外周は横ヘラ調整され，平瓦部凸面は縄目痕が縦走し顎付近ではヘラナデ磨消する。側面を三回面取りし，丸くする。一部朱の附着がみられる。この他に平安時代前期の軒平瓦として大阪吹田市岸部瓦窯系のものがある(5，第7図―4)が,これは対称C字形を中心飾りとする,西賀茂瓦窯系瓦と共通する唐草文様で,比較的硬質で，曲線顎を呈し，平瓦部凸面には縄目痕が縦走し，顎付近を縦ヘラケズリ磨消する。上外周は瓦当端部まで布目痕があってそれを円形状にヘラケズリ磨消する。側面は一回面取りする。顎に朱が付着している。次に『西寺』銘を有するもの（7，第7図―5）であるが，対称C字形を中心飾りとし大きく反転する唐草文をその左右に配し，下珠文帯に『西寺』銘を陽刻する。内裏跡や朝堂院跡から同笵瓦が出土している。平安時代中期の軒平瓦としては栗栖野系瓦が主体を占める。C字形に囲まれた中心飾り内に『栗』銘を陽刻し，その左右に二重唐草文が対称形に優雅に伸びる，一般に栗栖野瓦と称される軒平瓦(10，第7図―8）と，二重の細線で唐草文を表現したオカイラの森遺跡より出土する系統の軒平瓦（9・11，第7図―9・10）とがある。前者は文様面が浅く,下外周の厚さの小さい曲線顎で，上外周は布目痕を横ヘラ磨消する。顎から平面部凸面では横ヘラケズリの後全面を縦ヘラケズリ調整する。側面は二回面取りする。内裏跡から同笵瓦が出土している。その一方，後者は，外縁が高いわりには文様の隆起は小さく，上外周から平瓦部凹面は



第７図　出土軒平瓦拓影及び実測図

磨滅が甚しく詳細は不明である。下外周は横ヘラ調整痕が認められ，顎は垂下式曲線顎で，顎から平瓦部凸面に向って縦ヘラケズリする。側面は一回面取りする。焼成は軟質で，胎土は石英粒や長石粒を多量に含み極めて粗質である。平安時代後期の瓦として播磨系瓦がある（12，第７図―11)。蕨手状の唐草文を配し，上外周は平瓦部凹面にかけて大きく横位に指ナデ調整し，下外周もまたしかりである。瓦当面と平瓦との接合は『包み込み式』によっており，半月状の空間が生じている。これらの他に小破片ではあるが平安時代中期の唐草文軒平瓦（６，８，第７図―７）や平安時代後期の軒平瓦片（13）がある。

以上の軒平瓦の内，平安時代中期までのものは発掘区北側に集中して存した瓦溜より採集されたものである。平安時代後期のものは近世時の陶磁器片と共に井戸内より出土し，およそ二次的なものである。これらの現象は軒丸瓦と共通している。

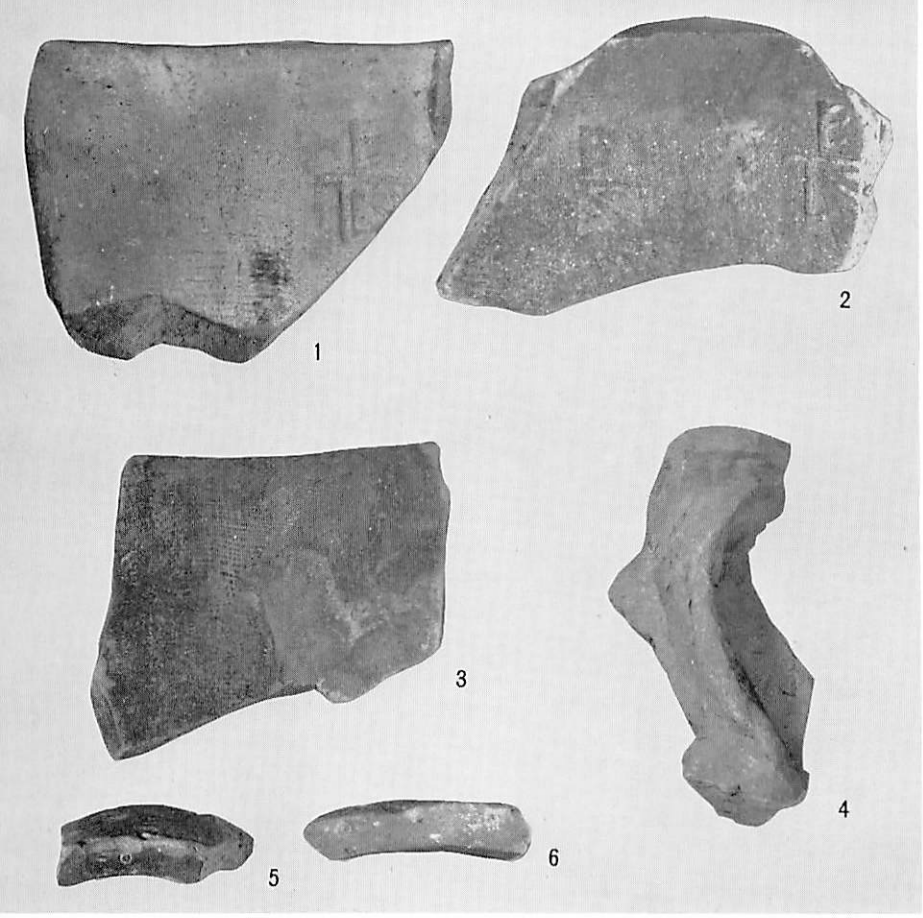
（３）文字瓦・鬼瓦

文字瓦は，平瓦凹面に『長』字を陽刻したもの六点と『A』字を陽刻したもの一点である。文字の位置は，平瓦凹面の広端部を上手とした広端面近くか，あるいは左側面に近い所を選択している。また平・丸瓦の端面に直径５㎜の竹管による円文を刻するものもある。この円文瓦は西賀茂瓦窯跡出土品中にもみられる。

鬼瓦は，硬質の手捏ねによるもので，原形側面を一部残存する小破片で，恐らく角か眉であろう。平安時代後期に属する。

（４）平瓦・丸瓦

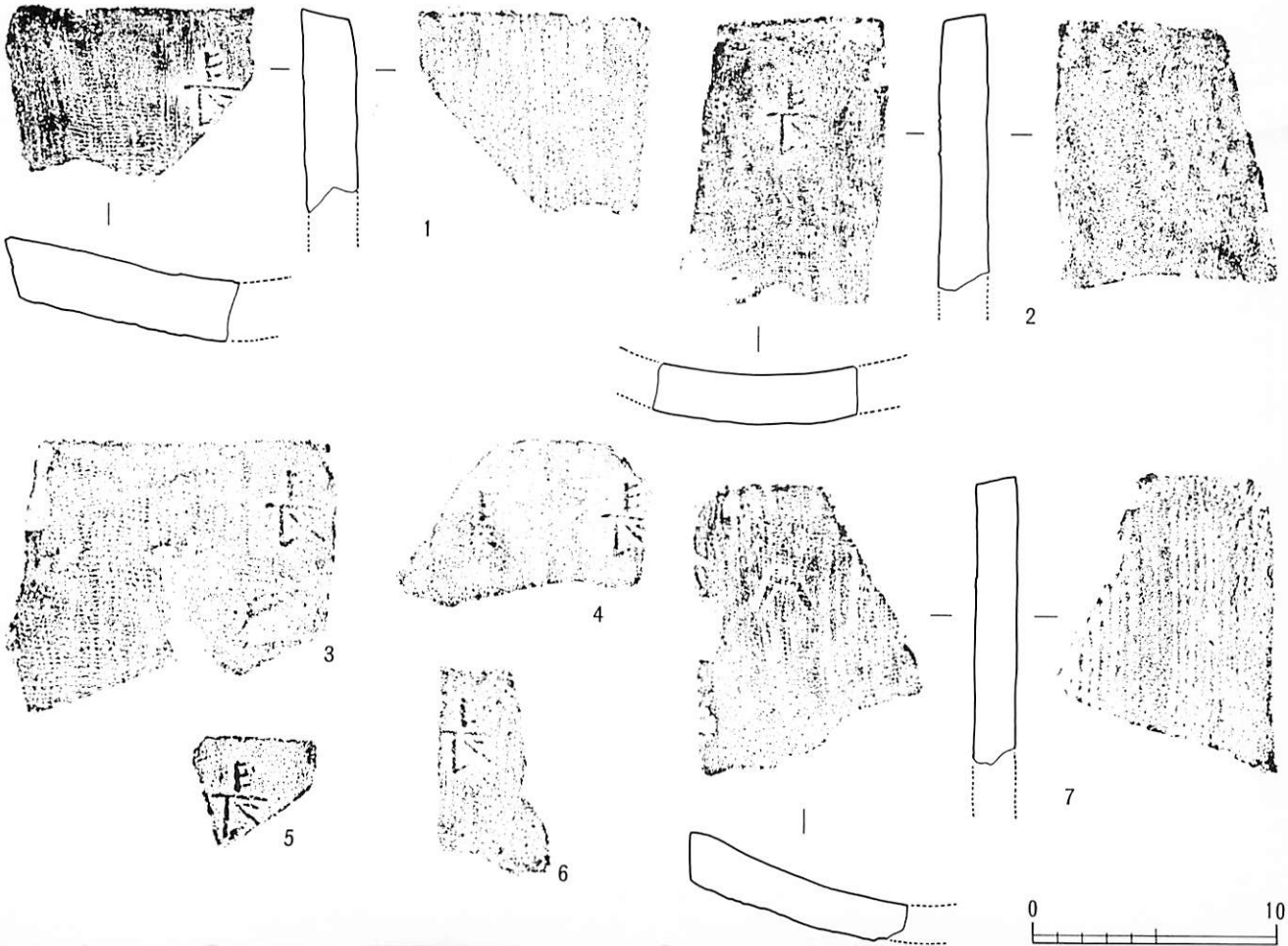
発掘区北側の瓦溜より出土した平瓦は，砂粒を多く含む胎土で，焼成は堅緻なものもあるが全体的に軟質のものが多い。これらは大きく三分類される。Ⅰ類（１・５）は，広端部凹凸両面は縄目痕や布目痕を櫛ガキで磨消しているが凸面は特に強く櫛ガキしたために瓦自体その部分が薄くなっている。狭端部凹凸両面には糸切り痕が明瞭である。凸面中央には縦位の縄目痕，凹面には布目痕がつく。凹凸両面に指先押捺痕が多くみられる。凹面中央に粘土の継ぎ目痕が横走する。Ⅱ類(２)は，軟質のものが圧倒的に多い。凹面には木目細い布目痕がつき，凸面には縦位あるいは斜向の縄目痕がみられる。側面，両端面は１～２回丁寧に面取りされる。一部に指先押捺

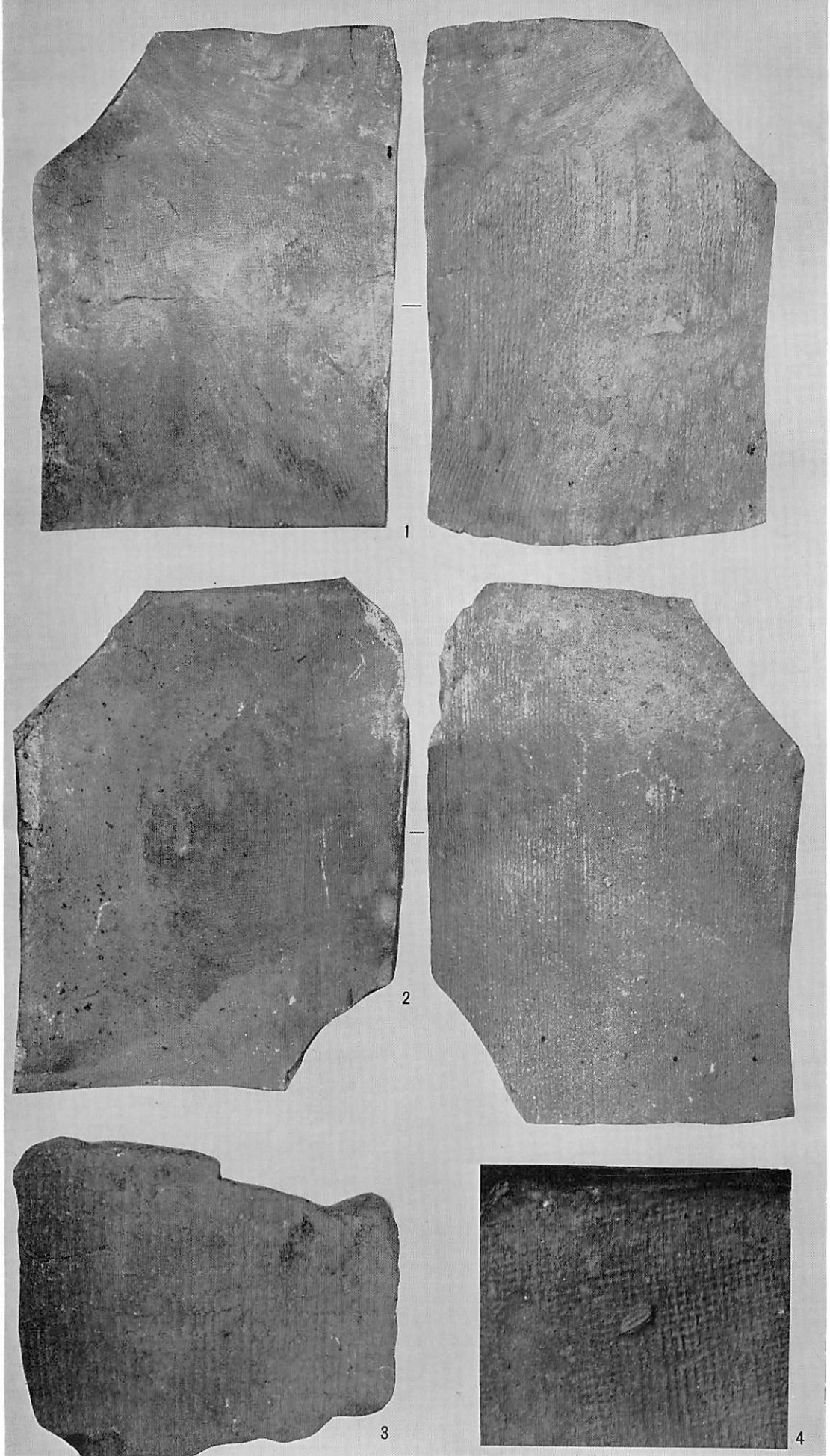


痕がつく。他の特徴として，平瓦凹面に籾痕のあるもの（5）や模骨痕のみられるものがある。『長』銘文字瓦は本類型瓦に属する。Ⅲ類（4）は，平瓦凸面に縦長長方形を一単位とする簾状の格子目叩き痕を特色とする。凹面には極めて細かい布目痕がみられ，側面は2回面取りする，胎土は粗質で，焼成は良好である。

同瓦溜出土の丸瓦も胎土・焼成の差異により二分される。Ⅰ類は，凸面に縄目痕がつきその上をヘラナデ磨消している。凹面には糸切り痕が明瞭でその上に布目痕がつく。玉縁は素文である。側面は一回面取りする。硬質のものもあるが軟質のものが多く，平瓦Ⅰ類と全く共通する。Ⅱ類は，凸面に縄目を施文した後にヘラナデ磨消し，凹面

第8図　出土文字瓦拓影及び実測図



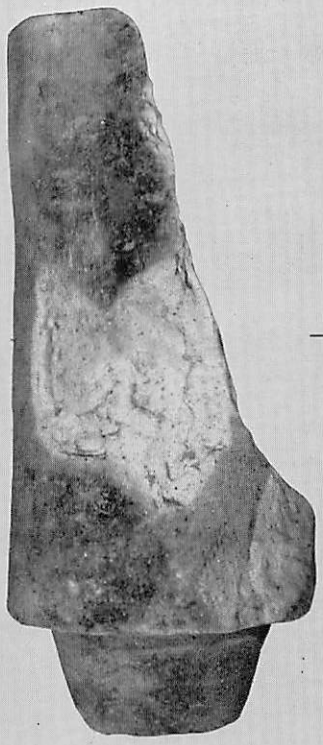
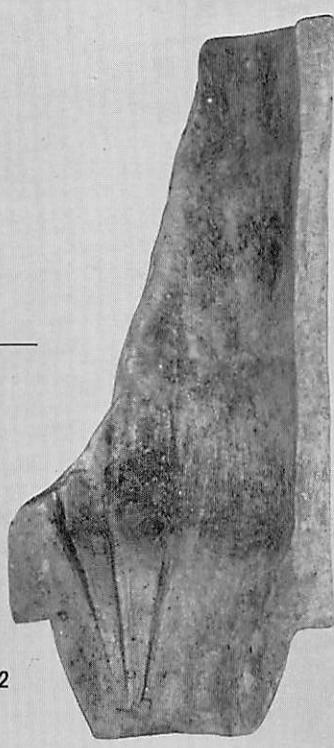


には布目痕がみられる。玉縁は素文が主であるが2～3条の凸帯文が横走するものも含まれる。また丸瓦凹面に粘土の継ぎ目痕が斜走したり（1），糸切り痕を僅かながら見い出せるものもある。このⅡ類は平瓦Ⅱ類と共通する。

これらⅠ・Ⅱ類の平・丸瓦は，平安時代中期までのもので，その特徴は，民部省南築垣跡出土平・丸瓦と極めて類似している。

平安時代後期の平瓦・丸瓦は，播磨・筑前地方のものが主体を占め，他に洛北の幡枝瓦窯産と思われるものもある。播磨産平瓦（2～4，6，7，11）は大形の斜格子目を平瓦凸面に施文するを特色とし，凹面には緻密な布目痕がつく。軟質のものが多い。一方丸瓦（13～18）は，行基葺丸瓦の形状をなし，玉縁はケズリ出しによる。凹凸両面は指ナデ調整を顕著に施こす。硬質のものが多い。筑前産瓦は小形の斜格子目を主体とした叩き痕

1

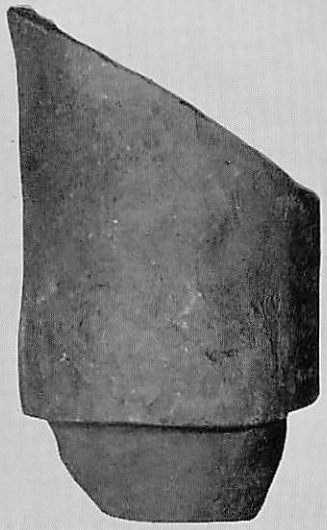
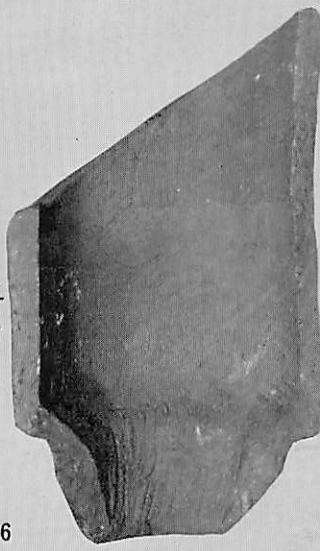



2

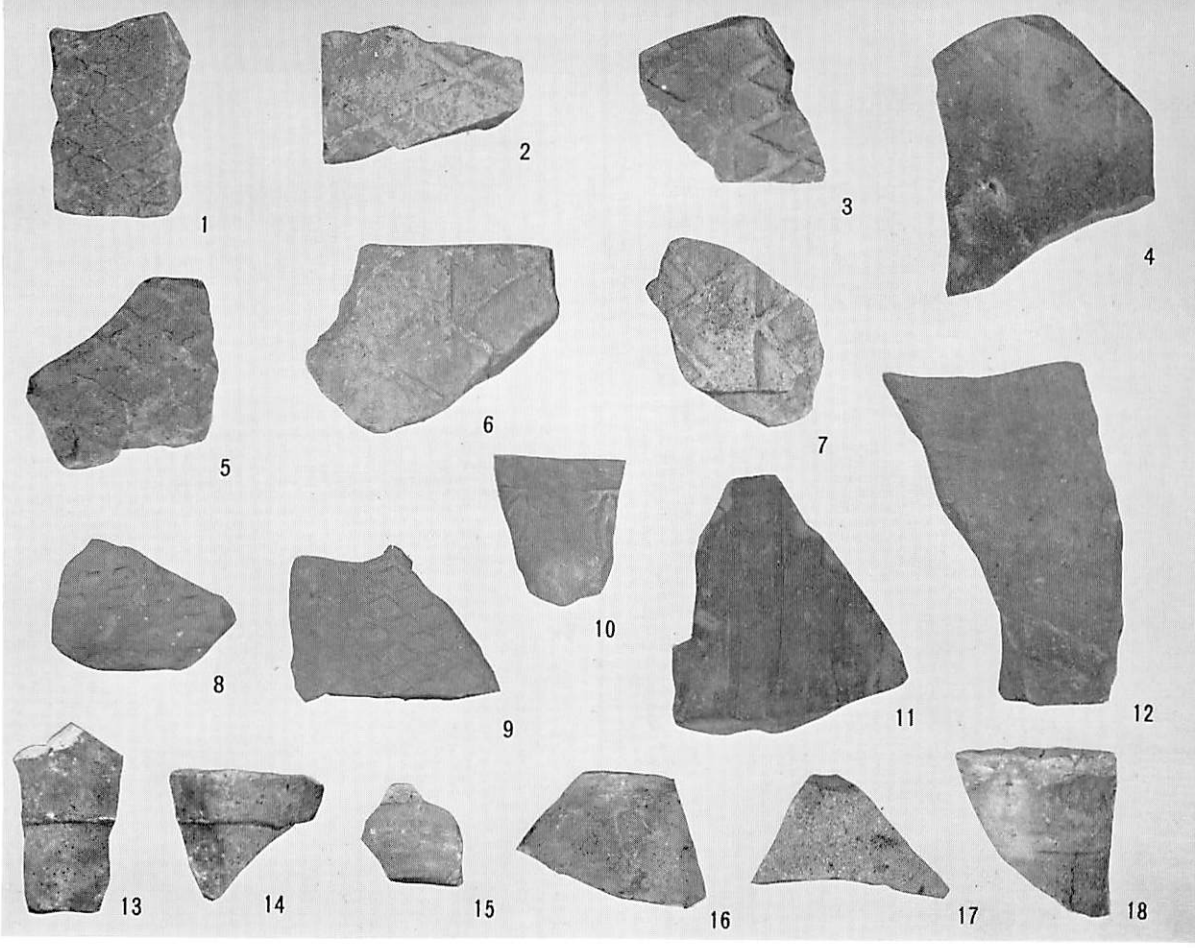
3

4

5

6



を有するもので（1，5，8～9），小形斜格子目の上方に魚状文叩きを有するものもある（9）。軟・硬質種々である。この二地方産瓦の他に幡枝瓦窯系のものがあり（12），これには凹凸両面に糸切り痕が明瞭につき，薄手である。本期の平，丸瓦は，2次的移動，堆積したもので，井戸内から特に多く出土した。播磨産瓦は民部省跡，豊楽院西築垣跡，朝堂院跡，内裏跡出土中に同笵叩き瓦をみいだせ，筑前産瓦は朝堂院，内裏跡を中心とする地域より多く出土している。

瓦類以外に，須恵器，土師器，灰釉陶器等の平安時代の土器類も少量出土したが全て小破片である。また凝灰岩製の延石も採集された。（写真5）

このように，主として瓦類は，ある段階で2次的に移動・堆積したものの中には平安時代前～後期の瓦も含まれるが，発掘区北側の瓦溜では年代的に古い瓦のみで占められ，平安時代のある時点での瓦のまとまりを示す貴重な資料と言えよう。

後　記

今回まとめられた二度にわたる平安宮朝堂院永寧堂跡の調査結果は，永寧堂の位置について朝堂院全体の配置とともに今後に問題を残している。しかし，平安中期以前の古瓦を中心とする出土遺物は平安京と地方との関係を含めて極めて重要な示唆に富んでおり，こうして内容を紹介することは平安京研究に僅かなりとも資することになるだろう。

本編を作製するにあたり次の方々に多大なる御援助を頂いた。

古城博子，渡辺和子，鈴木俊則，原田雅裕，木村滋，角高裕子，村山ちぐさ，渡辺美栄子。

製作に協力された以上の方々をはじめ，発掘調査を快よく許された杉崎正一氏，多くの無理を御願いした創栄建設の細井，山本両氏，調査の便宜を図って頂いた京都市文化財保護課の各位，調査費用で御援助頂いた（財）高梨学術奨励基金に対し，心から謝意を表する次第である。

平安宮朝堂院永寧堂跡の発掘調査

発行日　昭和52年6月30日

編集者　財團法人古代學協會
　　平安京調査本部　佐々木英夫

発行者　財團法人古代學協會
　　〒604　京都市中京区
　　三条大路北高倉小路西
　　振　替　京都 850番
　　TEL　075（222）0888

印　刷　東洋紙業株式会社